

# パンデミック時代の オンライン授業 —良心学・宗教研究との接点



こはら かつひろ  
小原 克博

(大学神学部教授)

## コロナと共に始まった二〇二〇年度

どの学校および教師においても、今年度の授業は、新型コロナウイルス感染症拡大との関係抜きに語ることはできないだろう。多数の教師が生涯で初めて授業動画を作成することを余儀なくされ、特にITスキルに自信のないものにとっては苦痛と戸惑いに満ちた年度スタートであったに違いない。とはいえ、この予期せぬ外圧により、これまで遅々として進まなかった教育のIT化、オンライン化が一気に進んだことも事実である。この変化を、危機的状況への一時しのぎとしてとらえているなら、危機が過ぎ去った後、すべてが元の木阿弥となる可能性が高い。しかし、コロナ禍の中の共通体験を、次の時代の教育を形づくるための鑄型とできるなら、それは教育のあり方を根本的に見直す貴重なチャンスともなるだろう。私が所属する同志社大学神学部では三月半ばに、コロナ対応は長期的なものになると覚悟を決め、授業のオンライン化への準備を始めた。私が講師を務め、授業のための動画作成やZOOM利用などの講習を行った。そこで、各教員が感じる苦勞の共通ポイントを垣間見た私は、

四月初めに、同じ苦勞をするかもしれない他の教師のために「授業のための動画作成——急場をしのぐためのスイスイ動画作成術」というYouTube動画を制作・公開した。このタイトルからもわかるように、当初は遊び半分の気持ちで始めたのだが、このシンプルなお話が、まったく間に全国で何万回と視聴され、数々のコメントが寄せられる中、私が想像していた以上に切羽詰まった教師が多いことに気づかされた。こうした状況に応えるため、この動画はシリーズ化され、その八回目の動画では「ポスト・コロナ時代の教育」と題して、私自身の過去二〇年の取り組みをも振り返っている。

## 「自由教育」の理想を実現するために

私は、オンライン授業を二〇年近く前に始めた。二〇〇一年、大学設置基準が改正され、インターネット授業が正規の授業として認められ、卒業に必要な一・二四単位のうち六〇単位まで単位認定されることになった。その前年から、この動きを察知していた私は、経済学部の宮崎耕先生、理工学部の芳賀博英先生と共に準備を進め、二〇〇一年四月からインターネット授業を開始した。当時、新聞や

雑誌では「同志社大、全国初のインターネット授業」などと紹介され、一躍、この分野のトップランナーとなったが、学内でのインターネット授業の裾野は広がらないまま二〇年近くが経ち、その間に他大学にどんどん抜かれ、今や同志社大学はオンライン授業に関しては、質量ともに周回遅れの感がある。一気に逆転できないにしても、今回のコロナ騒動をきっかけに、同志社らしい新境地を開拓できないだろうか。

ポスト・コロナ時代においては、特定の時間、特定の場所に学習者を拘束するという近代教育の枠組みが解体・流動化する可能性が高い。それを見据えた上で、対面で学ぶことの意義を再確認しつつ、創立一五〇周年を越えて、同志社が目指すべき二一世紀型の教育モデルを考えることは可能ではないか。

新島襄の最重要教育理念の一つは「自由教育」であった。学ぶことにより、真理を共に知ることにより、因習的に人を縛ってきた諸規範や様々な欲望から自由になって「自治自立」することのできる人間が育つことを新島は求めた。今日のテクノロジーを活用すれば、二一世紀にふさわしい形で「自由教育」の理想を実

現できるかもしれない。そのことは「私たちの学校をもっとも魅力的なものにするためには、ほかの学校に遅れをとらないこと、それどころかさらに先を行くこと」が、絶対に必要です」と語った新島の先取の精神にも合致することだろう。

なぜ、私は二〇年にわたりオンライン授業に取り組み、試行錯誤してきたのかそれは私がITオタクだからというだけではない。かつて「富国強兵」という一大スローガンのもとに、各教育機関は国家に有用な人材を大量生産することを求められた。そうした工場型一斉教育は今も続いている。新島がそれに抗って私学・同志社を設立したことを考えれば、この未完の課題に二一世紀の同志社が果敢に取り組む必然性があるのであり、その末端に私は自分自身を位置づけてきたのである。

学ぶ者を時間的・空間的拘束から解放する「自由教育」はどのように可能となるのか。脱「教室」のプロセスの中で、単にデジタル社会のトレンドに追随するようなことはしたくない。むしろ、我々がすでに取り込まれているデジタルな環境を批判的に対象化し、その外部に立つことができるような自由な精神を養うべ

きだろう。小さいなIT環境へと学生を誘うのではなく、それまで獲得してきた常識がごとく揺らぐ荒々しい場所へと、知の多様性があふれる「知のジャングル」へと導いていきたいのである（山極寿一・小原克博『人間の起源、宗教の誕生』参照）。

## 私の研究との関係

私の研究についても触れようと思ったが、もはや紙面が残されていない。しかし、これまで述べてきたことには、良心学研究センターで培われてきた研究上の知見が反映されている。「共に知る」を原義とする *conscience*（良心）の現代的意義は計り知れない。また、私の本来の専門である宗教研究は、人類が「今」「ここ」というリアルな制約を超えて、遠くにいる存在（死者を含む）とのバーチャルなつながりを志向してきたことを教えてくれる。前述のすべてがつながっていることを賢明な読者は理解してくれることと思う。